

## 日本語から見える「文法」の姿

上山あゆみ (京都外国語大学)

### 1. 「伝わる」ということと「文法的である」ということ

ことばの研究は、(1)の興味から始まることが多い。

- (1) どういう文がどういう意味を伝えているのか。どういう意味が  
どういう文で表現されるのか。

しかし、文と意味の関係というものは、理解が進めば進むほど、複雑だとい  
うことがわかってくる。同じことばでも、言った人と受け取った人で解  
釈が異なるのは日常茶飯事だし、長々とことばで何かを説明するよりも一  
瞬の表情の方がよっぽど説得的に何かを伝えることもある。考えれば考え  
るほど、意味とは何かという問題が大きくなるのしかかってくる。ことばを研  
究の対象とする限り、(1)の問題を無視することはできないし、これに関す  
る理解が進むことは重要であるが、(1)の問題は、「一般的な傾向がわかっ  
てくる」ことはあっても、「完全に解明する」ことは不可能だということ  
を覚悟せざるをえない。ことばに伝達の手段としての側面があることは誰  
も否定できないが、ことばの研究の目的として(1)を掲げるかどうかは、ま  
た別の問題である。本稿では、チョムスキーの提唱した生成文法の考え方  
を紹介したい。

生成文法では、まず(2)を解明することが重要だと考えられている。

- (2) どういう文が文法的な文なのか。文法性は、どのように決まっ  
ているのか。

単語を単に並べただけでも、ある種の伝達は可能であり、伝達能力におい  
ては「正しい文」とほとんど差がない場合もある。たとえば、(4)でも(3)  
と同じだけの情報量を伝える可能性はある。

- (3) My father and mother went to Alaska yesterday.  
(4) Father mother Alaska go yesterday.

---

\* この原稿の完成にあたっては、傍士元氏・田窪行則氏・金水敏氏・戸次大介  
氏・辻見枝氏に有益なコメントをいただいた。また連動読みの例文の一部は、筆  
者が1999年度京都大学で行った授業の参加者から提供されたものである。  
(この原稿は、月刊誌『日本語学』2000年4月臨時増刊号, vol.19, 明治書院,  
pp.169-181に掲載されているものです。明治書院のご厚意で、転載を許可して  
いただきました。なお、原文は縦書きのため、「傍線」という表現が使われていますが、  
ここでは横書きですので、適宜「下線」に読み替えていただけると幸いです。)

しかし、それにもかかわらず、英語話者は(3)が標準的な英語として「文法  
的な文」と言えるのに対して(4)はそうではないということが判断できる。  
生成文法で説明の対象にしているのは、(3)と(4)がどういう「意味」を伝え  
るか、ということではなく、(3)と(4)をこのように区別できる能力である。

文は単語から成るものである。しかし、文は単なる単語の集合とは違う。  
それぞれの単語がどのように組み合わせられて文を構成するかという「構  
造」があってはじめて、単語の集合が文になるのである。生成文法では、  
人間の頭の中に、単語から文を作り出す文法というメカニズムがあると考  
えている。そのメカニズムが具体的にどういうものなのか、そして、どの  
ようにして私達はこういうメカニズムを手に入れたのか、それを解明する  
のが生成文法の主要な目的とされている。このメカニズムから出てくる可  
能性のある文が「適格文」、それ以外のものが「非文」である<sup>1</sup>。

ここでは、もう少し話を具体的にするために、文法を、Numeration と呼  
ばれる(パラパラの)語の集合からLFとPFという二つの表示を生成す  
るメカニズムであると考えてみよう。LF表示は、意味の面から見た場合  
に語と語がどのように組み合わせられて文という一つの構造物になっ  
ているかを示すものであり<sup>2</sup>、PF表示は音の側面から見た文の構造を示すもの  
である。LF表示とPF表示はそれぞれ別のものであるが、私達が「文」  
と思っているものの二つの側面であり、この二つが揃ってはじめて「文」  
ということになる。ある文が「非文」であるという場合にも、適格なLF  
表示になっていないという場合と、適格なPF表示になっていないという  
場合とがある。したがって、(2)の問題に答えていくためには、文法という  
メカニズムの中で語と語がどのように構成されるのかということをも明ら  
かにし、LF表示・PF表示のそれぞれについて、どのような条件が満た

---

<sup>1</sup> たとえば、標準的な英語の場合、(3)はそのメカニズムの出力の1つであるは  
ずであるが、(4)はそうではなく、いわば単なる単語の表出にすぎないと言っ  
てもいいかもしれない。

<sup>2</sup> LF表示は、文そのものが持っている意味の表示であって、実際に言語を伝  
達に使っている場合に私達が感じている「意味」とは別のものである。典型的には、  
話す/書く時には、自分の頭の中にある「意味」がなるべく伝わりやすいように、  
LF表示がその「意味」に近そうな文を選んでいのだらうし、聞く/読む時には、  
いわば、その文のLF表示をきっかけとして何らかの「意味」を感じとっているの  
であらう。しかし、「行間を読む」必要がある場合や皮肉の場合などもあり、必ず  
しも、頭の中にある「意味」とLF表示が近いとは限らない。LF表示の生成は文  
法という仕組みの役割であるが、それをどのように頭の中の「意味」と対応させ  
るかは、まったく異種の活動/能力である。とにかく、伝達という行為が成功する  
か失敗するかは、話し手の意図した「意味」と聞き手が理解した「意味」がどの  
くらい近いかによって決まるわけで、その点では、ことば以外の伝達と何も変わり  
ない。上で、(1)の問題は完全に解明することが不可能だと述べたが、それは、(1)  
を目標にしている限り、ことばによる伝達といわゆる以心伝心のような伝達とを  
区別することが非常に困難になることが予想できるからである。

されていれば適格文ということになるのかをはっきりさせなければならぬ。

このように、(2)を追究していくためには、文法のメカニズムそのものを明らかにする必要がある。もちろん最初から文法のメカニズム全体がわかっているわけではないので、私達は文法のメカニズムに関する仮説を出し、その仮説から導かれる(2)の答えが私達の感覚と合致するかどうかを確かめることによって仮説を検証し、不適切な部分があったら修正して、少しずつ実際の文法の姿に近づいていこうとしているのである。

しかし、(2)を研究の目標とすることそのものに対して否定的な立場も根強い。そもそも、(3)と(4)の違いも、社会的に容認された形であるかどうかという違いにすぎないと考える立場もあり、「伝わる」かどうかと独立に「文法性」という概念が確立しうるのか、ということも問題視される。しかし、「文法性を判断できる」「判断できない」だけでは単なる水掛け論に終わりがかねない。むしろ、文を生み出す独立のメカニズムが存在していると仮定しなければ説明できない現象を示していくことによって、まず、文法というメカニズムの存在を証明すべきである。その上で、容認不可能と思われる文をよく観察し、その中で非文(つまり、文法の仕組みからは出てこないはずの文)と別の要因によって容認不可能に感じられる文とを区別し、文法の特徴を明らかにしていかなければならない。では、一体、どういう現象を取り上げて、どのように観察を進めていくべきなのか、それが非常に重要な問題となってくる。

## 2. 一致現象

文法というメカニズムを追究する場合、(5)のようなアプローチを取ることができれば、一番確実であろう。

- (5) ことばの性質の中で、伝達という目的とは直接関係のない現象に注目して、その現象を生み出すメカニズムを考察する。

伝達という側面から見て情報量がないにもかかわらず常に(もしくは、ある条件下で)存在する現象があったとすると、それは、伝達とは独立のメカニズムの産物である可能性が高くなる。そうすると、そういう現象を生み出すメカニズムを構築していくことによって文法というメカニズムの一端が見えてくることになる。

この観点から、特に 90 年代以降、チョムスキーが最も注目してきたのは、一致という現象であった。

- (6) a. I am a student.  
b. He is a student.  
c. \*He am a student.  
d. \*I is a student.

例えば(6)で、be 動詞の形が am であるか is であるか、という違いは情報伝達という側面から見ると、まったく意味を持っていないと言ってよい。「ひとごとではない、というニュアンスをこめて(6c)のように言う」ということもなければ、「自分を客観的に見て(6d)のように言う」ということもない。つまり、一致は純粋に文法の問題であり、だからこそ、チョムスキーは、一致現象に注目して、文法というメカニズムの存在を証明し、その姿を浮き彫りにしようとしているのである。

では、日本語の場合、(6)のような一致の現象があるだろうか。たとえば、敬語というものが一種の一致現象ではないかと言われることがある。確かに次の例を見れば、そういうふうに見えるかもしれない。

- (7) a. 社長がいらっしゃった。  
b. 私が参ります。

しかし、「社長」という言葉を使ってもその人物に敬意を払っていない場合には敬語を使うとは限らないし、社外の人に話す場合には当然「社長が参ります」となる。さすがに「私がいらっしゃった」という表現は冗談にしか使われないかもしれないが、冗談としては可能であるという点でも "\*I is a student." などとは異なっている。

日本語においては、まったく「意味」をもたないような現象というもの、少なくとも英語ほど明示的には存在していないのではないか。そうだとすると、日本語では(5)のアプローチをとることが難しいということになる<sup>3</sup>。

## 3. 連動読み

### 3.1. 日本語の指示詞 - ソとア

(5)のアプローチが難しいとなると、次の候補となるのが(8)である。

- (8) 他の語と関係を持つことによってはじめて生まれる「意味」に注目して、その関係を生み出すメカニズムを考察する。

他の語と関係なく、その語単独で「意味」が持てるものがほとんどかもしれないが、ことばとことばの関係にもとづいて生まれている「意味」ならば、まさに、単語から文を作り出す過程でもたらされていることになる。

そこで、いわゆる「コソアド」の指示表現、特に、ソ系列とア系列の違

<sup>3</sup> 英語の観察によって得られた結果と日本語の観察が何らかの意味において矛盾しないということを示すことによって間接的に文法という仕組みの存在の主張の一部とすることを目指す方向性もあるだろう。しかし、英語における観察とは独立に、ことばとことばの関係が存在する証拠と文法の性質を日本語で示せたとしたら、さらに、文法という仕組みの存在の必要性が主張できることになる。

いに注目したい。一般的には、ソ系列が「聞き手に近いもの」を指し、ア系列が「話し手からも聞き手からも遠いもの」を指すとされている。しかし、もちろんのことながら、これはその場で見えるものを指す場合のことである。(9)-(11)の例に示されるように、ソ系列にせよ、ア系列にせよ、その場で見えない人/物を指すことができる。

- (9) A: 昨日 山田に会ったよ。  
B: そう。 あいつ 元気だった?  
C: その人、Bくんの同級生?
- (10) A: 今度 バナナケーキ 焼いてあげるね。  
B: やった! あれ 大好物なんだ。  
C: それ 私の分もお願いね。
- (11) A: 昨日も学生さんが待ってましたよ。  
B: あの学生、今日も来ると思う?  
C: その学生なら、さっき見かけたよ。

しかし、対象となるものが現場にはなく、かつ、その前に何も文が発せられていない場合、ア系列は使える時もあるが、ソ系列を使うことはできない<sup>4</sup>。

- (12) (状況: 一人の刑事が犯人を追って、あるアパートの部屋の前に来る。タイミングを見て、一気に踏み込むが、そこには犯人は見当たらず、単に男達がマージャンをしている。刑事は、この男達が犯人をかくまっているに違いないと思って叫ぶ。)  
刑事: { あいつ / #そいつ } はどこだ!?
- (13) (状況: 昨日、陽子は正男に手作りのケーキをあげた。陽子は、正男の反応が気になるので、電話をかけて、開口一番に聞く。)  
陽子: ねえねえ、{ あれ / #それ }、食べた?
- (14) (状況: 昨日面会に来た学生の名前が思い出せない教授が秘書に内線電話をかけ尋ねる。)  
教授: 昨日来た { あの / #その } 学生、名前 何だった?

ただし、(12)-(14)でソ系列指示詞が使えないと言っても、文そのものが非文というわけではない。同じ文でも、次のように別の文脈ならば、ごく自然に使えるのである。

- (15) 刑事 1: 今さっき警官があの封筒を届けると言って持っていきまし

<sup>4</sup> 以下の例文では、(非文ではないが)当該文脈において容認可能性の低い文に「#」をつけることにする。

たよ。  
(刑事 2 は、それが誰なのか見当がつかないが、あわてて。)  
刑事 2: { そいつ / #あいつ } はどこだ!

- (16) 正男: この前、高校生からチョコレートもらっちゃったよ。  
(陽子は、そのチョコレートを見ていない。)  
陽子: ねえねえ、{ それ / #あれ }、食べた?
- (17) 秘書: 昨日、学生さんが1時間以上、お帰りを待っていたようでした。  
(教授は、その学生が誰なのかわからない。)  
教授: 昨日来た { その / #あの } 学生、名前 何だった?

(15)-(17)では、先行文脈があり、この場合ならソ系列指示詞が使える。ここで注意してほしいのは、(12)-(14)との違いは聞き手が指示表現の内容を推定できるかどうかではないということである。(12)-(14)の状況でも、聞き手が話し手の意図を察する可能性は十分にあり、だからこそア系列指示詞も容認可能なわけであるが、それにもかかわらずソ系列指示詞が使えないということが重要なのである。つまり、ソ系列指示詞は、対象物が見えない場合には、原則的に必ず言語的な先行詞が必要な語なのであり、その意味で、(8)のアプローチが適用できる語だと考えてよい。

- (18) ソ系列指示詞は、その場に対象物がない場合には、他のことばと言語的**関係**を持つことによってはじめて解釈可能になる。

言いかえれば、(12)-(14)でソ系列指示詞が使えなかったのは、解釈のために必要な言語的**関係**が成り立ってないため、ということになる。これに対して、ア系列指示詞はどうだろうか。(12)-(14)と(15)-(17)の違いの鍵になっているのは、話し手が、その対象となっている人/物を直接に知っているかどうかということである。つまり、ア系列指示詞というのは、話し手がその対象物を直接体験を通じて知っている時にのみ使うことができるということになり、解釈可能かどうかは、「先行詞」の有無(つまり、言語的**関係**の有無)とは無関係である<sup>5</sup>。その点で、ソ系列指示詞の場合とは大きく異なっている。

(12)-(14)でソ系列指示詞が使えないのは非常にはっきりとした感覚であり、その意味では文法理論構築の基盤たりえるが、(15)-(17)からもわかるように、文自体が非文というわけではない。そこで、次の節では、この節

<sup>5</sup> ア系列指示詞のこのようなとらえ方は、Kuroda 1979, Takubo & Kinsui 1997 によっている。ア系列指示詞は、それそのものが対象物を独立に指示するものであり、他のことばと言語的**関係**を持つ必要がない。ただし、ア系列指示詞が他のことばと言語的**関係**をもつことができないかどうかは、また別の問題であるが、ここでは紙幅の都合上、その問題にふれない。

(2000) 『日本語学』 4月臨時増刊号 (vol.19), 明治書院, pp.169-181 掲載

の観察に基づきつつ、(文脈と関係なく)文法性の判断が可能な現象を紹介しよう。

### 3.2. 連動読み

上では、指示物がある場合、ソ系列指示詞は、他のことばと言語的關係を持ってはじめて解釈可能になる語であるということ述べた。この性質により、ソ系列指示詞は、「先行詞」によっては上の例とは異なったタイプの解釈を持つことがある。たとえば、(19)と(20)を比べてほしい。それぞれ、ソ系列指示詞とその先行詞に傍線が付してある。

- (19) a. 自民党の党員は、そこが一番だと思って党員になっているに違いない。  
b. 甲子園には、そこを本拠地とする球団がある。  
c. あの大臣の出身県の職員はみな、その県の条例に十分通じているらしい。
- (20) a. どの政党の党員もそこが一番だと思って党員になっているに違いない。  
b. 甲子園も東京ドームも、そこを本拠地とする球団がある。  
c. どの県の職員がその県の条例に一番通じているか、競い合ってみましょう。

(19)のソ系列指示詞は一つのことを指しているのに対して、(20)のソ系列指示詞は、値が一つに決まっているわけではない。たとえば、(20a)ならば、「A政党の党員はA政党が一番だと思って党員になっているに違いないし、B政党の党員はB政党が一番だと思って党員になっているに違いないし、C政党の...」という意味であり、「そこ」に相当する部分は、それぞれ、先行詞の部分の解釈と連動して値が変わっていく。このような読みを**連動読み**と呼ぶことにしよう。(20a)も(20b)も、文脈上、「そこ」の先行詞は傍線部だと解釈しないと不自然なので、結果的に連動読みが一番自然な解釈となる。(20c)の場合は、「その県」がどこか特定の県を指していると考えても文脈としては成り立つので、連動読み以外の解釈もありうるが、「その県」の先行詞が傍線部だとすると、連動読みにはかならない。

連動読みが可能だという事実そのものが、ソ系列指示詞の解釈が先行詞との言語的關係に基づいて行われているということを物語っている。その証拠に、ア系列指示詞の場合は連動読みができない。

- (21) a. 自民党の党員は、あそこが一番だと思って党員になっているに違いない。  
b. 甲子園には、あそこを本拠地とする球団がある。  
c. あの大臣の出身県の職員はみな、あの県の条例に十分通じているらしい。

(2000) 『日本語学』 4月臨時増刊号 (vol.19), 明治書院, pp.169-181 掲載

- (22) a. \*どの政党の党員もあそこが一番だと思って党員になっているに違いない。  
b. \*甲子園も東京ドームも、あそこを本拠地とする球団がある。  
c. \*どの県の職員があの県の条例に一番通じているか、競い合ってみましょう。

(22a,b)は、連動読み以外の解釈が不自然な状況を述べているので、ア系列指示詞を使うことによって、非常に解釈しづらい文になってしまう。(22c)は、連動読みでない解釈ならば問題ないが、「A県の職員がA県の条例、B県の職員がB県の条例」という連動読みが不可能であることは明らかであろう。

連動読みの文は複雑な文になりやすい。そもそも連動読みの文というのは、たくさんの状況を圧縮して一つの文にまとめて述べるものなので、日常会話などで頻繁に見られるタイプの文ではない。しかし、普段見慣れていないタイプの文であるにもかかわらず、(20)と(22)の差は非常にはっきりしている。さらに、連動読みの容認可能性は、特に先行文脈に依存することなく、その文だけを見て決定できる<sup>6</sup>。

### 3.3. 連動読みの可能性と文法のメカニズム

連動読みは、英語の研究でも注目されてきた。たとえば、(23a)は連動読みが可能で、「メアリは、A君はA君の先生誰かに話すべきで、B君はB君の先生誰かに話すべきで、C君は...と思っている」という解釈が可能である。それに対して(23b)の場合は、「メアリは、A君の先生誰かがA君に話すべきで、B君の先生誰かがB君に話すべきで、C君の...と思っている」という連動読みはできないと言われている。

- (23) a. Mary thinks every boy should talk to one of his teachers.  
b. \*Mary thinks one of his teachers should talk to every boy.

連動読みが何らかの言語的關係にもとづいて可能になる解釈だとすると、(23b)では、その言語的關係が成り立たないということになる。仮に、と の間にそういう言語的關係が成り立っていることを**連繋** < , > と書

<sup>6</sup> 連動読みの例文はおしなべて不自然と感じる話者もあり、そういう不自然な文を観察の対象とすることについての疑問がときに指摘される。

しかし、そもそもどんな文でも、その文が「意味のある」発話だと思えるだけの状況設定がなければ文は不自然に感じられるということを思い起こさなければならぬ。本文中でも述べたように、連動読みの文は、いくつかの状況を一つの文に圧縮して述べるという点で、単純な文よりも大きな動機を必要とする文であり、そのため、「なぜそういう言い方がしたいか」という点に関する状況設定が十分でないと感じる場合が多い可能性がある。しかし、適切な状況設定が思いつきにくいということと、文法がこの文の連動読みを許すかということとはまったく別のことである。いったん状況さえ納得できてしまえば、連動読みの文法判断は可能になる。

くことにしよう。これが成り立っている時には の解釈が によって決ま  
っているとす。すると、例えば(23a)では連繋 <every boy, his > が成り立  
っていて、そのために連動読みが可能になっていることになり、(23b)では  
その連繋が成り立たないために連動読みが不可能であることになる<sup>7</sup>。もち  
ろんこれは一例にすぎないが、この種の観察にもとづいて、いわば次のよ  
うにとらえられていることが多かった。

(24) 連繋 < 、 > が成り立つためには、 は を c 統御していなければ  
ならない<sup>8</sup>。

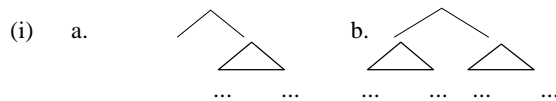
さて、(25)では、一見 every boy が his を c 統御していないように見え  
るが、連動読みの可能性は(23)と変わっていない<sup>9</sup>。

- (25) a. Guess [which one of his teachers]<sub>i</sub> Mary thinks every boy should talk to *t<sub>i</sub>*.
- b. \*Guess [which one of his teachers]<sub>i</sub> Mary thinks *t<sub>i</sub>* should talk to every boy.

しかし、発音される場合の語順は(25)でも、解釈される段階には例えば(26)  
のような形になっていると仮定すれば、(24)に基づいて連動読みの有無を  
説明することができる<sup>10</sup>。

<sup>7</sup> もう少し正確に言うと、(23a)で成り立っている連繋 < 、 > の は、every boy そのものではなく、その痕跡と考えるべきであるが、本稿ではその点については触れない。

<sup>8</sup> 表現の仕方は違うが、このようなとらえ方は例えば Reinhart 1983 などに見られるものである。c 統御という概念をおおまかに説明すると、(i-a)の場合は、が を c 統御しているが は を c 統御しておらず、(i-b)の場合は、も も お互いを c 統御していない。



このように、c 統御とは文構造における優位性をあらわす概念の 1 つである。

<sup>9</sup> (25)は、たとえば「担任の先生」とか「化学の先生」などの答えが期待されている文だと考えればよい。

<sup>10</sup> (25)のような構文に関しては、連動読みの有無だけではなく他にも(26)のように仮定した方がうまく説明できる現象がいろいろあり、これらは、まるで wh 句が痕跡 *t* の位置で解釈されているようだということから再構築現象(reconstruction effects)と呼ばれている。英語における再構築現象の研究は、Engdahl 1980, van Riemsdijk & Williams 1981, Barss 1986, Lebeaux 1990 などを始めとして、多数あるが、(26)のような LF を仮定するかどうかも含めて、具体的にこの現象をどのように分析

- (26) a. Guess [WHICH] Mary thinks every boy should talk to [ \_\_\_\_ one of his teachers].
- b. \*Guess [WHICH] Mary thinks [ \_\_\_\_ one of his teachers] should talk to every boy.

文法というメカニズムの出力が(音に関する) P F と(意味解釈に関する) L F という 2 つの表示だと仮定している場合、P F 表示は(25)のようになっているが L F 表示は(26)のようになっていると考えることが可能である。そこで、(24)を(27)のように言いかえておくと、(23a,b),(25a,b)すべての文の連動読みの可能性の違いを(27)一つでとらえられることになる。

(27) 連繋 < 、 > が成り立つためには、 は L F において を c 統御していなければならない。

今度は日本語の場合を見てみよう。(23a)と(25a)のような対応は日本語でも見られる。

- (28) a. どの自動車会社も、三回以上その車を買った人に年賀状を送っている。
- b. 三回以上その車を買った人に、どの自動車会社も年賀状を送っている。

したがって、(28b)のような語順の文でも L F は(28a)と同じだと考えれば、連動読みが可能であることが説明できる<sup>11</sup>。

ところが、(29)を見てほしい。(29a)は(28a)とほぼ同じような意味の文だと解釈できるにもかかわらず、(29b)のような語順にすると連動読みが非常に難しくなってしまう。

- (29) a. どの自動車会社も、三回以上その自動車会社の車を買った人に年賀状を送っている。
- b. ?\*三回以上その自動車会社の車を買った人に、どの自動車会社も年賀状を送っている。

(28b)の L F 表示が(28a)の L F 表示と同じになりえるとすれば、(29b)の L F 表示も(29a)の L F 表示と同じになりえていいはずである。それなのに連動読みの可能性に差が出ている。この事実はどうのように理解したらいいだろうか。

例えば、連動読みをもたらず言語的關係に二種類あると仮定すれば、(28)と(29)の違いが導かれる可能性がある。ここでは Ueyama 1998 での提案の

するかはそれぞれ異なっている。

<sup>11</sup> (28b)の L F 表示が常に(28a)の L F 表示と同じになると考えているわけではないが、その問題については、ここではふれない。

(2000) 『日本語学』 4月臨時増刊号 (vol.19), 明治書院, pp.169-181 掲載

一部を紹介しよう。まず、(28)と(29)において「どの自動車会社も」というのを、「そこ/その自動車会社」というのをとすると、次のように整理できる。

- (28a),(29a) ... L F においては は を c 統御しており、P F においては(つまり、表層の語順としては) は よりも前にある。  
(28b),(29b) ... L F においては は を c 統御しているが、P F においては は の後ろにある。

そこで、次のような2種類の連繋が連動読みをもたらずとを考えてみよう。

(30) 構造連繋 < 、 >  
は、L F において を c 統御していなければならない。

(31) I 指標連繋 < 、 >  
は、P F において に先行していなければならない。

すると、(29b)に構造連繋の成立を妨げるさらに別の理由があると考えれば、(28)と(29)の違いが説明できることになる。たとえば次のように考えてみる。

(32) 「そこ」のような表現はどのような連繋にでも適しているが、「その自動車会社」のような表現は、I 指標連繋にしか適しておらず、構造連繋に適していない。

こう仮定すれば、(28a,b),(29a)では連動読みが可能であり、(29b)では連動読みができないことが正しく予測されることになる。

- (28a) ... 構造連繋も I 指標連繋も成立可能なので、どちらにせよ、連動読みが可能。  
(28b) ... 構造連繋の可能性しかないが、とにかく、連動読みは可能。  
(29a) ... I 指標連繋の可能性しかないが、とにかく、連動読みは可能。  
(29b) ... (結果的に)構造連繋も I 指標連繋も成り立たないので、連動読み不可。

もちろん、(32)がなぜなのか説明されなければ納得できないが、Ueyama 1998 の第5章では、これは構造連繋と I 指標連繋の解釈の方法の違いから導出されるのではないかと考えている。

(33) 構造連繋 < 、 >  
( という言語表現のもっている情報は無視されて ) 純粋に構造的に解釈が決定される。

(34) I 指標連繋 < 、 >  
という言語表現のもっている情報も解釈の際に考慮される。

(2000) 『日本語学』 4月臨時増刊号 (vol.19), 明治書院, pp.169-181 掲載

(33)を仮定すると、「そこ」と「その自動車会社」では表現としての情報量に差があるので、こういう名詞句が構造連繋 < 、 > の となった場合、無視されてしまう情報量に差が出ることになる。つまり、「その自動車会社」という表現では無視されてしまう情報量が比較的多いため、構造連繋 < 、 > の となっていた場合に言語使用者が違和感をおぼえるのではないかと、という説明である<sup>12</sup>。

この説明にもとづく、(29b)は厳密には非文というわけではなく、言語使用者の感覚として容認不可能だと言っていることになる。(32)で「適していない」というような、ある意味で曖昧な表現を用いたのは、むしろ意図的であり、文法のメカニズム外のことは、傾向としてしか述べることはできないと思っているからである。それでも、(28)-(29)の観察が無意味だったということにはならない。その観察にもとづいて、文法の性質の一部である(30),(31),(33),(34)が導かれたからである。

### 3.4. 日本語と英語

さて、ここまで見てきたことは、日本語の文法に限った性質なのだろうか。ここで考慮されるべきなのが、(35)の「事実」である。

- (35) a. 子供は、ある一定の環境におかれさえすれば、組織だった訓練を経なくても、比較的短期間で、語と語を組み合わせる複雑な文でも生成することができるようになる。  
b. 子供は、環境によっては、両親とはまったく別の言語を習得することも可能である。

(35)を説明するためには、(36)のように仮定する必要があるとチョムスキーは主張する<sup>13</sup>。

<sup>12</sup> I 指標連繋 < 、 > で がどのように解釈されるか、その詳細にはここでは立ち入れないが、Ueyama 1998 の第5章では次のような英語の場合と同じ方法で解釈されているのではないかと提案している。

(i) a. Few conservative congressmen admire Kennedy, and they are very junior.

b. [Every farmer who owns a skinny donkey] beats it.

実際、(i)のような場合、英語においても、代名詞のかわりに内容量のある指示表現を用いることが可能である。

(ii) a. Few conservative congressmen admire Kennedy, and {those congressmen/those conservative congressmen} are very junior.

b. [Every farmer who owns a skinny donkey] beats {that donkey/that skinny donkey}.

<sup>13</sup> (36)はチョムスキーが述べている言葉通りではなく、かなり言い換えたものである。ちなみに、(36a)の「人間にとって生得的な知識」が、生成文法で「普通文法」と呼ばれるもののことである。「語と語を組み合わせる文を構成する力」と言っても、たとえば英語と日本語で基本的な語順が違うことから明らかのように、単純に一樣なものを想定するわけにはいかないが、各言語の共通点と相違点をどの

(2000) 『日本語学』 4月臨時増刊号 (vol.19), 明治書院, pp.169-181 掲載

- (36) a. 語と語を組み合わせて文を構成する力やどのような PF/LF 表示が適格かという知識(の一部)はもともと人間にとって生得的なもので、どの言語にも共通した側面である。  
b. それ以外の側面は、子供が実例に基づいて習得できる種類のものではない。

このように、生成文法は、最終的には人間という種が持っている言語能力にせまっていこうとしているのである。

この考え方にしたがうと、(30),(31),(33),(34)の場合、「子供が実例に基づいて習得できる種類のもの」とは思われぬので、どの言語にも共通した側面だと考えなければならぬ。つまり、たとえば、英語でも(28)-(29)と同じ現象が見られるはずだということである。最後に英語に関して少しだけ見ておこう。

英語の場合、連動読みの例では代名詞を用いることが非常に多いが、Evans 1977,1980 で指摘されているように、指示表現でも連動読みが可能ながある。

- (37) Every linguist insisted that John had demanded an evaluation of him.  
(38) a. Every logician was walking with a boy near that logician's house. (Evans 1977: 491)  
b. Every linguist insisted that John had demanded an evaluation of that linguist. (Ueyama 1998: section 3.4.1 (74b))

しかし、(37)の連動読みは構造連繋にもとづいている可能性があるが、指示表現は代名詞と比べると情報内容を持っているので、(38)の連動読みは I 指標連繋に基づいている可能性が高い。すると、(31)により、(38)は語順が変わると連動読みが困難になる可能性があることになる。確かに、次のような容認可能性の差が観察される。

- (39) a. [Which evaluation of him]<sub>i</sub> did every linguist insist that John had demanded  $t_1$ ? (Ueyama 1998: section 3.4.1 (75a))  
b. ?\*[Which evaluation of that linguist]<sub>i</sub> did every linguist insist that John had demanded  $t_1$ ? (Ueyama 1998: section 3.4.1 (76a))

従来、英語の研究においては、連動読みの例は大部分、代名詞を使ってきたため、(39)のような違いは知られてこなかった。これは、日本語の例を調べたからこそ見つかった英語の特性の一つと言えるだろう。また、それと同時に、英語という日本語以外の言語で予測通りの結果が観察されたということは、3.3 節での連動読みの分析の方向性が間違っていないということも示していることになる。

---

ようにとらえれば(35)が一番うまく説明できるか、いろいろ仮説が提案されている。

(2000) 『日本語学』 4月臨時増刊号 (vol.19), 明治書院, pp.169-181 掲載

#### 4. 最後に

本稿では、連動読みの可能性について、「そこ」と「その自動車会社」という二つの表現の差だけを例に出したが、ここで紹介されている分析が正しければ、この二つの表現に限らず、様々な名詞句表現に関して予測が生まれることになる。Hoji et al. (1999, 2000) では、他に、「彼」「この～」「that ～」「the ～」などの表現も考慮に入れて、この分析が検証されている。また、Kinsui et al. (2000)では、日本語の指示表現体系を歴史的に考察し、ソ系列指示詞の位置づけがどのような変遷をたどってきたかを明らかにしている。

Ueyama 1998 で提案されている分析は、もちろん、いろいろな問題点をはらんでいる。しかし、上でも述べたように、分析とは観察の終着点ではなく、表面的な観察からより深い洞察へ進むための手段でもある。時には大幅な見直しを余儀なくされる場合もあるが、どのような現象が文法のメカニズムによって説明されるべき現象なのか、ということを常に意識的に考慮して、その総体を視野に入れておく限り、どのように分析が変わっても、人間の言語能力に対する私達の理解が後退することはありえないと考えている。現在、見えてきている「文法」の姿は、全体のごく一部かもしれないが、これを足がかりにして進んでいきたい。

#### 参考文献

- Barss, Andrew (1986) *Chains and Anaphoric Dependence, On Reconstruction and Its Implications*, Doctoral dissertation, MIT, Cambridge.  
Engdahl, Elisabet (1980) *The Syntax and Semantics of Questions in Swedish*, Doctoral dissertation, University of Massachusetts, Amherst.  
Evans, Gareth (1977) "Pronouns, Quantifiers, and Relative Clauses," *Canadian Journal of Philosophy* (I) 7-3, pp.467-536, (II) 7-4, pp.777-797.  
Evans, Gareth (1980) "Pronouns," *Linguistic Inquiry* 11-2, pp.337-362.  
Hoji, Hajime, Satoshi Kinsui, Yukinori Takubo, & Ayumi Ueyama (1999) "Demonstratives, Bound Variables, and Reconstruction Effects," GLOW 国際言語学会 (於: 南山大学, 1999.9.20.) の発表。(学会論文集出版予定)  
Hoji, Hajime, Satoshi Kinsui, Yukinori Takubo, & Ayumi Ueyama (2000) "The Demonstratives in Modern Japanese," 未発表論文.  
Kinsui, Satoshi, Hajime Hoji, Yukinori Takubo, & Ayumi Ueyama (2000) "On the Historical Change of the Demonstrative System in Japanese," 未発表論文.  
Kuroda, S.-Y. (1979) 「(コ)ソアについて」 『英語と日本語と』 くろしお出版, pp.41-59.  
Lebeaux, David (1990) "Relative Clauses, Licensing, and the Nature of the Derivation," *NELS* 20-2, pp.318-332.  
Reinhart, Tanya (1983) *Anaphora and Semantic Interpretation*, The University of

(2000) 『日本語学』 4月臨時増刊号 (vol.19), 明治書院, pp.169-181 掲載

Chicago Press, Chicago.

van Riemsdijk, Henk & Edwin Williams (1981) "NP-structure," *The Linguistic Review* 1, pp.171-217.

Takubo, Yukinori & Satoshi Kinsui (1997) "Discourse Management in terms of Mental Spaces," *Journal of Pragmatics*, Vol 28, No.6. pp.741-758, Elsevier Science, Amsterdam.

Ueyama, Ayumi (1998) *Two Types of Dependency*, Doctoral dissertation, University of Southern California, distributed by GSIL publications, USC, Los Angeles.

( うえやま・あゆみ 京都外国語大学助教授 )

a\_ueyama@kufs.ac.jp